

# 下頭橋由来

吉川英治

青空文庫



飯櫃いびつ

十八になるお次つぎが、ひとつの嫁入りの資格にと、巢鴨村すがもむらまで千蔭流けいこの稽古けいこに通い始めてから、もう二年にもなる。

その間ずうつと、彼女は家を出るたび帯の間へ、穴のあいた寛永通宝を一枚ずつ、入れて行くのを忘れた日はなかった。

「あんな、張合あはいのある乞食こじきってないもの——」

と、自分の心へ言い訳する程、彼女はそれを怠あやまらなかつた。

河原から憐あわれつぽい眼まなこを上げ、街道の旅人へ、毎日、必死に頭かぶを下くだげているお菰こもの岩公いわこうが、自分の姿を飯橋の上に見ると待つ

ていたように百遍もお辞儀をする。

「——あんな一生懸命なお辞儀つて、誰だつてしやしないもの」と、それを受けるのも、楽しみだった。

きょうも、石神井川しやくじいがわにかかつて、

(岩公、いる?)

と、お次は、下を覗のぞいた。

一ぺんも言葉こそ交わしたことはないが、きょうは岩公が何かよろこ欣んでいるか、考えているか、体の具合がいいか悪いか、お次にはよく分った。

(あ。お嬢様)

岩公も、大家たいけの娘へ、声をかけては悪いと思うのか、眼で、眸

で、お辞儀だけで、もうその姿へ呼びかけた。

「ほちゃん、と仮橋の下で、小さな水音がした。

「あら」

あわてて、お次の手は、髪へ行つた。泣きたい顔になつた。

銀の釵かんざしが沈しずんでゆく。

嫁入りまで、挿さしてはいけないと、母にいわれたのを――

沼尻の川なので、浅すそうに透とおき徹とつては見えるけれど、底そこ泥土どろがやわらかで、仮橋から墜おちた子供などが、何人もそこでは死んでいた。

怨うらめしげに、水を見ていた。

でも、仕方がないと、諦あきらめたように、お次が悄しお々しおと立ち去つ

てゆくと、河原にいたお菰の岩公は、泥土の中へ、そろそろと入つて行つた。

「おお深けえ」

底は<sup>すべ</sup>は<sup>すべ</sup>る。

いくらでも、脚が入る。

でも岩公は、やめなかつた。腰から胸までへ、泥だらけの蓮<sup>れんこ</sup>根掘<sup>んぼ</sup>りみたい<sup>んぼ</sup>に、釵を探した。

「ねえつてことはねえ。ねえつてことはねえ」

独りでぶつぶつ言いながら、日が暮れるのも知らなかつた。

紫木綿<sup>むらさきもめん</sup>の包みを胸に、稽古を終えて帰つて来たお次は、星

明りの水に、<sup>かわうそ</sup>獺<sup>かわうそ</sup>みたい<sup>かわうそ</sup>な人影が、ぎぶぎぶ動いているので、

「おや、誰？」

と、眼をまるくして、

「——岩公じゃないの。何してるの」

「不思議だ。ねえ筈はねえ」

「何が」

「お嬢様の」

「あら。おまえ私の釵を探していてくれるのかえ。そんなら、もうよしておくれ。風邪をひくよ、寒いのに」

お次が、しきりに止めたので、岩公はむっそりと河原へ上がった。

「——有難うね」

初めて口をきいたのだった。

仮橋をこえて、振りかえると、岩公が薄暗い河原で、大きな嚏くさまをしていた。

翌る日、お次はまたそこへ来て、

「まあ岩公、まだ探してるの」

と、吃びっくり驚した。

「ねえ筈はねえもの」

岩公は、同じことを答えた。

三日目も四日目も真っ黒になって、泥土の中を脚や手で探っている彼を見た。お次は、街道の旅人や、土地の人にも、きまりが悪くなつて、



「頼むから、もう止めてね」

と、いった。

岩公は、やめなかった。

「ねえ筈はねえ」

と、いった。

「後生だから、止してよ。止さなければ、私、もう明日あしたからここを通らないから」

そういつて、脅おどかすと、やっと次の日は、飯いびつ櫃びつを前において、

岩公は河原に坐っていた。

慾よくでやっていたのか。

でなければ、少し抜けているのか。

お次は何だか、岩公に少し嫌な気がさしてきた。

もうそんな事も忘れて、冬を越した。春は、大根の花が咲く。

練馬といえは大根の産地なので、殊ことさら、沢庵漬問屋とは呼ば

ない。樽屋という旧家だった。彼女はそこの娘だった。

石神井川の仮橋は、豪雨があるとすぐ流された。

また、半町ばかり、新しい仮橋は、位置が変わった。お次はこの

頃、橋の下を見ないことにしていたが、その日、

「お嬢さん。ありましたぜっ」

と、ふいに河原から声をかけられて、吃驚した。

釵かんざしを持って、岩公が駈け上がった。来た。

「ま」

「あつたよ。あつたよ」

お次は、眼が熱くなった。

彼女へそれを渡すと、岩公は、満足そうに河原へ降りて行った。飯櫃の前に坐つて、もう後へ来る旅人の影へ、頭を下げていた。

## 漬物倉

根からの乞食でもあるまいに、

土地の者は、岩公を理解するに苦しんだが、この頃では彼の姿が見えない日は、みんなして、

「どうしたのか、病氣じゃないか」

と、心配する程だった。

なぜなら、岩公がこの土地に流れて来てから、泥棒や火事がなくなつた。また、石神井川しやくじいへ墜ちた子や子守を、四度も救つていた。また、汚い物は人が寝ている間に、河原へ運んで焼いてくれるし、後はきれいに箒ほうきめ目が立っていた。

「変な男だ。だが可愛い奴だ」

と、練馬板橋の人々は、余る食べ物があると、河原のかまぼこ小屋へ、やりに行つた。

この土地へ流れて来てからも、十二、三年になる。酒を飲むふうもなし、女が欲しそうな顔でもない。年もまだ三十四、五だろう。身体も満足なら顔だちも人並だった。背が小つちやくつて、

丸顔で、笑うと愛嬌さえある。

村の悪童たちは、

「岩ンベ。岩ンベ」

と、石をぶついたり、上から小便をひっかけたりした。岩公は笑ってるだけだった。ここは、甲州の裏街道なので、旅人もよく通る。岩公が一心に頭を下げるのを見ると、

「一文は安い」

と、よく合羽の袖から、鏹びたせん銭せんが投げられた。

ひる午まえの稼ひらぎを数えて、岩公は、藁わらを穴とに貫とおしていた。それから飯櫃ひらのめしを食べ、首をのばして川の水を啜すすった。

かげろう陽炎かげろうが立って、眠くなるような昼だった。仮橋の上に、旅支

度の武士が、じつと下を見ていたが、

「はてな」

と、つぶや眩くらいた。

岩公は、仰向いて、

「がぼ、がぼ、がぼ……」

と、口の中で水を鳴らしていた。

いきなり、羽織を脱ぎ捨てた武士は、

「おのれっ、佐太郎だなっ」

と、上から呶鳴った。

「げっ」

岩公の口から、水が、ぴゅつと走った。

「うぬ、よくも多年、姿を晦くらましおつたな。勝負をしろつ」  
河原へ、飛び降りた。

反対に、岩公は、上へ逃げ上がった。まるで転がるように、迅はやかった。

「卑怯者へいせつ者しやつ」

武士もつづいて、飛び上がった。しかし、街道にはもう人影が見えなかった。

草鞋わらじに白ほこりい埃ほこりを立て、

「亭主ていしゆつ、今この前を、乞食こじきが逃げて行つたか」  
と、居酒屋の前で、息を弾はずませた。

「なに、通らん。——すると、畜生ちくせい」

引つ返して、横道へ走つた。葭簣茶屋よしずぢややを目がけて、

「ちよつと、物を訊くが」

「え」

休んでいた町人達が、

「何です、お武家さん」

「今、その河原から逃げ上がった若い乞食、どつちへ行つたか  
知るまいか」

「知りませんね」

「はてな」

と、茶屋の裏へ廻つて、

「あつ向うだつ」



と、仮橋の板を踏み鳴らして、どンドン駈け出した。大根畑の白い花をちらして、岩公の逃げてゆくのが、遥かはるに見えた。

「おういつ。佐太郎」

武士は、二度も転んだ。

「貴様も武家の飯を食った男でないか。卑怯な奴。待てっ」

だが、岩公は、振向きもしなかつた。練馬の部落へ逃げ込んだ。水車が止まる。あっちこつちで、鶏の群れが、けたたましい叫びをあげ、翼を搏うつた。

「臆病者ツ、人非人めつ。返せつ、待てつ、弟の敵だ、妹の」

唳鳴りながら、旅の武士は、目や鼻をひつつらせて、泣いていた。そこへ持って来て満面の汗と埃が、凄ほこりい形相を彩いろどっている。

旧家らしい土蔵つづき、その母屋の前庭へ、向う見ずに駈け込んだのである。どこかで一度、斬りつけたとみえ、右には抜刀ぬきみをさげていた。

樽屋たるやの家族は、お次の婚礼が近いので南縁に縫ぬい物ものをひろげていたが、

「きやつ」

と、逃げ惑って、

「あれっ、誰か来て——っ」

と、叫んだ。

漬物蔵から、向う鉢巻の若い者が大勢駈け出して来た。

「やいつ武士さんびん、うぬあ気狂いか」

と、武士を支えた。

「狂人ではないつ、拙者は小田原の大久保加賀守の家来、岡本半助という者。今その漬物蔵へ逃げ込んだは、隣家の秋山家にした若党の佐太郎という者。……あ、水を一杯くれ」

「水だによ。贅ぜいたく沢をいってやがら」

「忝かたじけない——。話が、前後したが、それはもう十三年も前だ、若党の佐太郎めに騙たばかられて、拙者の妹八重は家出した。それを連れ戻そうとして、追って行った拙者の弟は、佐太郎めに討たれ、妹は、前非を恥じて、自害いたした」

「へえ？」

「弟きょうだい妹二人の敵かたき、佐太郎めを、以来尋ね廻ること十年あまり。

それを、見つけたのだ。——この床下へ隠れ込んだ乞食めが、昔の若党佐太郎に相違ない。各、恐れ入るが、ここへ潜もぐつて、追い出して下されい」

誰も、返辞をしなかった。

お次は、老母のうしろに、白い顔をして、戦おのきながら聞いていた。

「たのむ。武士がこうして——」と、見苦しい程、昂奮してる岡本半助は、膝の下まで手を下げて、

「お情けじゃ、追い出して下され」

でも、みんな、黙然としていた。

「御承知なくば、やむを得ん、拙者自身で入る程に、無作法、お

ゆるし願いたい」

「あ……」

お次は思わず伸びあがった。

すると、若いのが、

「おっと、待ちねえ」

「なんじや、何で止める」

「あのお菰こもは、村の者はよく知ってるがそんな悪人じやねえかたき 敵  
なんか討ったつてつまらねえ話だ。堪かんにん忍してやんねえ」

「黙れつ、町人とはちがう。また佐太郎が悪人でないと、何を証  
拠に」

「だって、どう考えたつて。——なアおい」

「よし、其方そのほうどもが拒むなら、彼奴きやつが、這い出して来るまで、ここに頑張つておるぞ」

「それや、勝手だ」

武士は、そこにあつた竹竿に目をつけ、蔵の中へ、突っ込んで、掻き廻した。

「佐太郎つ、出て来い。もはや、汝の天命は尽きたのだ。いさぎよく、半助に討たれろ」

若い者たちが、舌打ちして、

「やかましいや」

と、竹竿を引ひツ奪たくつた。

「敵かたきを討つのが、武士さむらいの商売なら、こちとらにも、稼かせがぎ飯にな

らねえ商売があるんだ。邪魔だから、退のいてくれ」

わざと漬物樽を幾つも転がして半助を追い退けた。

半助は、齒がみをしたが、どうも出来なかつた。ここから近い川かわごえ越藩へ行って、仇討免状を示し、正当な手続きをとれば、捕えられぬこともないが、その間に佐太郎を逃がされると、何にもならない。

「ううむ、根こんくらべだ。彼奴きやつも、食わずにはおられまい」

半助は、蔵のまわりを歩き出した。五日でも、十日でも、こうしているぞというように、唇を噛んでいた。

## 大根月夜

びた、びた、と半助の蹠あしおと音が、夜半よなかでも外に聞えた。

「お次、そなたは、こんな果報が、嬉しゆうないのか」

と、樽屋たるや三右衛門は、父として嫁入り近い彼女の沈しんんでいるこ

とが、気懸りでもあり、不足でもあつた。

島台しまだい、紅白の縮緬ちりめん、柳樽やなぎだる、座敷は彼女の祝い物で一杯

だつた。家族たちは、毎晩のように、忙せわしげに、夜を更ふかした。

「いいえ」

お次は笑つてみせた。

でも、靨えくぼに何となく陰があつた。

「まだ、何か不足があるのか」



「勿体ない」

「あるなら、言うがよい。……なんだ……なんだお前、泣いてるじゃないか」

「だって、あたし、可哀そうでならないんですもの。こんな倅せな私にくらべて」

「誰が。アア後に残る祖母ぼあさんの事か」

「いえ、あの……岩公が」

「何をいうかと思えば、お菰の岩公を。はははは、おかしな奴じや、なるほど、岩公もふびんだが為なした罪業ざいごう、悪因悪果じや。

あのお武家の熱い根気にも、わしは感じた。もう今夜で、三日三晩、ああしてござる」

「嫌な人ですね」

「お武家として、立派な事だ。でも、若い奴らは、頑がんとして意地張ったまま、岩公を渡さぬようだが、もう輿こしい入れも近いのに迷惑千万、あしたは、わしが若い者を説いて、渡してやろうと、思うているのじゃ」

「お父さんの情なしっ」

と、お次は、袂たもとで父を打つ真似して、

「嫌です、私は嫌」と、かぶりを振った。

泣いているのである。三右衛門は、単純な処女おとめの感傷とおおしく眺めていたが、果てしのない彼女の涙に、

「なぜ、そんなに」

と、少しきつい眼で咎めた。

「でも、私は何だか。——お父様、後生ですから、助けてやって」

「そうは行かない。お武家様が、見張っているものを」

「けれど、こうなれば……」と、お次は、一心になつて考えたよ  
うな智慧を、父の膝に甘えて囁いた。

「庄吉をよべ」

しばらくすると、彼の居間で、手が鳴った。若い者の庄吉は、

主人の三右衛門と何か密々ひそひそと話し込んでいたが、翌朝になると、

向う鉢巻をした十人ばかりの男達と一緒に、

「それ、積んだ、積んだ」

と、蔵から二十樽ほどの、沢庵漬を転がし出した。

「届け先は、日本橋の大丸だぜ」

大八車へ、それを積むと、縄をかけて、勢いよく曳き出したのである。お次は、心配そうに、窓から見ていた。

「さすがのお武家も気がつかない。どうじゃこれでよかろう」

「え」

にこと、淋しくうなず頷いた。

窓からその顔が消えると、じつと、蔵の蔭に立っていた岡本半助は、道をかえて、外へ駈け出していた。そして、乾いた街道を、白い埃につつまれて行く荷車の後から、

「敵かたきつ、佐太郎待てつ」

と呶鳴った。

きらつと、陽の光をかすめた刀の白さを見ると、若い者たちは、「来やがった」

と、叫んで、われ勝ちに、避けた。

大八車の梶が、どんと前に落ちた弾みに、半助の刃が、樽の繩を、めちやめちやに切った。山に積んだその上から、一つの空き樽が真っ先に落ちた。

ころころと、生き物みたいに、樽が先へ出た。そして、ぽんと蓋ふたが脱とれると、その中から、糠ぬかだらけになった岩公が、飛び出した。

「このツ——」

がつんと妙な音が聞えた。

畑に潜もぐつて見ていた若い者たちが、思わずわつと言つた時は、そこが真つ赤になつてもう岩公の首が見当らなかつた。

右に血刀と、左の手に、生々しい首を引つ掴んで、岡本半助は、気が狂つたように、畑の中の裸街道を一目散に駆け出していた。げらげらと笑つてゆく声が、茫然と見ていた若い者たちの耳に残つた。

「岩公が殺された。岩公が——」

と、村の者が、真つ黒に集まつて来た。そして、口をきわめて侍ののしを罵つた。

首のない死骸が河原のかまぼこ小屋へ、運ばれた。ここで通夜をしてやろうと、いう者も出て来た。

すると、小屋の中を、掻き廻していた男が大変なものを見つけ  
た。造り酒屋で糟かすを絞るのに使う真つ黒な麻の袋だ。それに、岩  
公がきようまで、頭を下げて稼いだ金が、ほとんど、一文も費つかつ  
てないように、串くしにして、いっぱいに詰っていた。

かぞえてみると、ひどいもので、七十四両と若干なにがしになつてい  
た。そして、袋のうえには、なるほど、武家奉公もしたらしい見  
事な書体で、

げとうおくまんべん 一罪消業  
下頭億万遍 一罪消業

と、書いてあつた。

その他ほかには、何にもない。

代官所の認可ゆるしを得て、村では、それから間もなく七十余両の鑑び

たせん  
 銭で街道安全の橋はしづしん普請に取りかかった。

× × ×

月が美しかった。

大根の花だの、菜の花だの。

畑の中をちようちん提灯がたくさん並んで、江戸の下町へ嫁とついでゆく

お次の輿こしがゆられて来た。

「おじさん、ちよつと止めて」

石神井川の上だった。

普請なかばの仮橋の上に、お次は、駕をとめさせた。もんつきはか紋付

ま袴の叔父だの伯母だのに囲まれながら、大根の花の村を、じつと見ていた。



「――別れじやもの」

と、伯母も、媒なこうど人も、駕のうしろでそつと眼をふいた。

(岩公、左様なら……)

晴れの黒髪から、銀の釵かんざしを抜き取って川の中へ、そつと落した。

――細い月の光が、キラキラと沈んで行った。



# 青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、  
講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「オール読物 五月号」

1933（昭和8）年

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 下頭橋由来

吉川英治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>